連載― 教材化の工夫〔8〕

「言葉とわたしたち」（三年第一単元）

―日本語シンポジウムに挑戦しよう―

教材化の工夫を考える会

一　はじめに

「なぜ、国語を学ぶのか。」三年生になって最初の授業で生徒たちに問うてみた。「え？先生、いったい何言ってるんだろう？」と怪訝（けげん）そうな表情を見せる者もいれば、考え込んでいる者もいた。言うまでもなく、国語科は言葉の学習、それは母語である日本語の学習である。ここ数年、日本語ブームが訪れ、書店で「日本語○△」などというタイトルの本が平積みされているのを目にする機会は多い。すべての教科の基本になる教科だといわれながらも、肝心の生徒自身が、何のために学習するのかを考えた機会がなかったゆえに、このような質問にすぐに答えられない。この状況を危機的状況ととらえ、憂えている国語科教師は少なくないのではないだろうか。

「この一年かけて、『なぜ国語を学ぶのか』ということを自分自身に問いながら、学習に取り組んでほしい。」「一年間、日本語にしっかりと目を向けてほしい。」と投げかけて、最初の授業を終えた。

三年第一単元「言葉とわたしたち」は、「日本語を考えよう」「日本語を巡って話し合おう」という二つの教材から構成されている。今まで、面と向かって日本語について考えたことがなかった生徒たちが、この学習を通して、日本語について少しでも考える機会となればいいと考え、指導計画を作成した。

二　指導計画作成にあたって

第一教材は、日本語について調査したことを報告書にまとめるという「書く活動」が中心となって構成されている。一次は、吉野弘「詩が生まれるとき」と小池保「日本語は乱れているか」を読み、身近な日本語について目を向け、気がついたことをできるだけ多く書き留めておくようにした。二次は、自分自身が日本語について

気がついたことを家に持ち帰り、日本語についてどのような問題点があるかインタビューする。そしてミニ報告書を作成した。

第二教材は、これらの報告書をもとに「日本語を巡って話し合おう」という「話し合い活動」が中心となって構成されている。「シンポジウム」といっても、生徒には何のことだかわからない。まして、新学級になってすぐの生徒たちにとっては、自分から率先してシンポジスト（発言者）になること自体に抵抗感を感じてしまうのではないだろうか。そこで、本実践では正式なシンポジウムの形式をとらず、多くの生徒が安心して自分の意見を述べ、聞き合う国語教室を目ざした。四月当初、学級内の人間関係が安定しない中で無理に形式だけを整えるのではなく、お互いの意見を受け入れられるように配慮しながら計画を立てた。

三　学習の実際

①指導事項（学習指導要領との関連）

話の中心の部分と付加的な部分、事実と意見との関係に注意し、話の論理的な構成や展開を考えて、話したり聞き取ったりすること。（A―イ）

ここでの指導事項は、シンポジウム＝話し合い活動＝（A―エ　話し合い）にはしていない。あくまでもシンポジウムを想定して、自分の意見を述べる活動なので、（A―イ　構成や論理）としている。話し合いについては、年間計画で別に位置づけている。

②学習目標（資料1）

○話し合いの一つの形態であるシンポジウムについて理解しよう。

○シンポジスト（発言者）になったつもりで、自分の考えを発表しよう。

○友達の意見を聞き、日本語に対する見方や考え方を深めよう。

右の目標は、この学習で何を学んでいるのか、どのような力を身につけてほしいかを焦点化して生徒に示したものである。

③指導の流れ

第一次（第1時）

○シンポジウムとは何かをとらえる。

シンポジウムの全体像をとらえるために、教科書本文のほかに次のものを使用した。

・シンポジウムのビデオ（会場の全体風景や、発言の様子などをとらえさせるために、ニュース番組を録画して紹介した。）

・シンポジウム発表の様子を録音したＣＤ（題材が中学

生に適したものをと探したが、適当なものが見つからずに、平成九年度版中学校国語学習指導書付録「表現教材指導ＣＤ」を使用した。家族について考えるというテーマなので、自分の意見を構築するのに影響はないと考えた。）

第二次（第2時・第3時）

○発言の内容を考える。（資料2）

前教材で作成したミニ報告書なども参考にしながら内容を考えた。シンポジウムはそれぞれの分野からの専門家が発言者になることが多い。そこで、今回は、これからの日本語の担い手である若者の代表という立場を想定して発言することにした。

○発表をする。

視聴覚教室を使用した。司会は、教師が行う。発表者は四人ずつ前に出て、一人ずつ発表する。四人が終わった段階で、質問したい人がいればその内容をメモすることにした。（この段階では実際に質問する場面は設定していない。）発表時にはマイクを使う。発表の授業になると、ともすると大きな声で発表すること＝評価が高いと考えている生徒もいる。伝えたい内容が効果的に伝えられるように話そうと指示をした。また、マイクを使ったことで、実際のシンポジウムの雰囲気を味わえたようだ。

○発表を聞く。

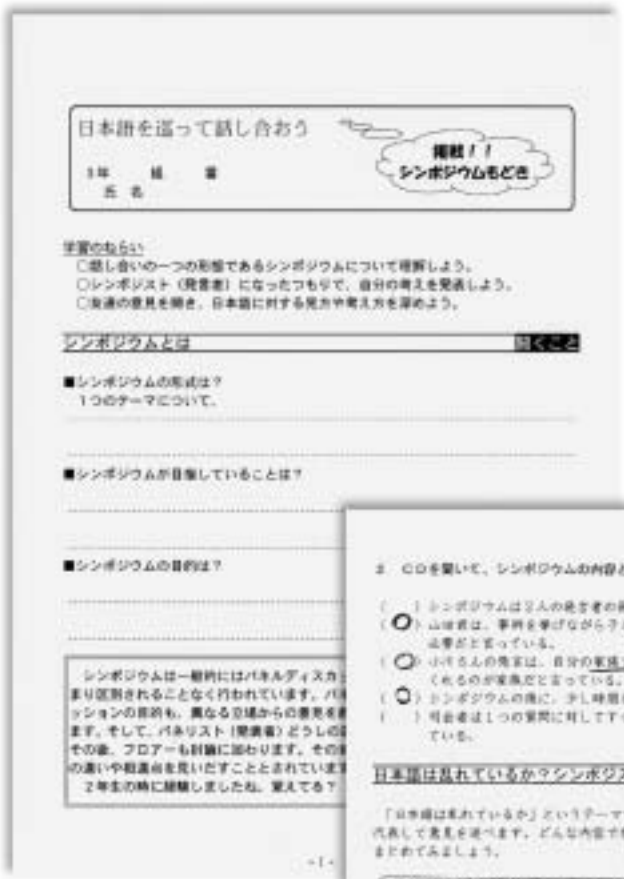
生徒には、質問したい内容を聞きながらメモしないように、と確認した。確かにわたしたち大人も、シンポジウムなどに参加した場合は、メモをとりながら聞くことが日常である。しかし、今回はあらかじめ同一のテーマで発表するのである。大切なのは、発表者の考え方や具体例や根拠などと、自分との違いや同じところを探しながら聞き取ることであると考えた。生徒たちにも最初のうちは戸惑いもあったようだが、次第に自分との違いを探す聞き方ができるようになった。

第三次（第4時）

○シンポジウムを振り返る。

相互評価として、発表者の中から二人を選んで、質問や意見をメモに書いて見せ合うという活動を取り入れ、意見交換が行えるようにした。また、最後に、この学習を通して日本語について考えたこと、発表を通して、発表を聞いて、変容したことはないかという視点から自己評価を行った。

◀ 資料1


日本語を巡って話し合おう

掲載！！
シンポジウムもどき

1年　組　番
氏名

学習のねらい
□話し合いの一つの形態であるシンポジウムについて理解しよう。
○シンポジスト（発言者）になったつもりで、自分の考えを発表しよう。
□友達の意見を聞き、日本語に対する見方や考え方を深めよう。

シンポジウムとは　聞くこと

■シンポジウムの形式は？
1つのテーマについて、

■シンポジウムが目指していることは？

■シンポジウムの目的は？

シンポジウムは一般的にはパネルディスカ
まり区別されることなく行われています。パ
ッションの目的も、異なる立場からの意見を
ます。そして、パネリスト（発言者）どうしの
その後、フロアーも討論に加わります。その
の違いや相違点を見いだすことされています
2年生の時に経験しましたね。覚えてる？

-1-

▼ 資料2


2　○印を聞いて、シンポジウムの内容とあっているものには○をつけよう。

（　）1 シンポジウムは3人の発言者の発言の後は、質問は受け付けていない。
（○）2 山崎君は、事例を挙げながら子どもが自立するためには、親の厳しい態度が必要だと言っている。
（○）3 小川さんの発言は、自分の家族の事例を挙げながら、一心の芽ばえをはぐくめるのが家庭だとしている。
（○）4 シンポジウムの後に、少し時間をとって質問の内容を考えてもらっている。
（　）5 司会者は1つの質問に対してすぐに発言者を指名し、答えてもらうようにしている。

日本語は乱れているか？シンポジストになってみよう！　話すこと

「日本語は乱れているか」というテーマでシンポジウムをします。あなたは、若者を代表して意見を述べます。どんな内容で意見を述べますか。以前の内容を参考にしてまとめてみましょう。

ヒント
組み立て方
自分の立場を説明
考えを述べる
どうしてそう思うか、根拠や理由を述べる。
具体例があれば
まとめ
プラス
○相手を説得
○意見を補強
○有名人の言葉を
引用して

④評価規準

左のような評価規準を作成した。発表の場面では、「話す・聞く能力」「言語」を評価項目としたカードを使用した。発表を聞きながら評価カードにメモをして、後日、生徒に手渡すようにした。

観　点	評価規準
国語への関心・意欲・態度	B：日本語について自ら課題意識や問題意識を持って、発表原稿を考えようとしている。 A：日本語について自ら課題意識や問題意識を持って、発表原稿を考え準備を進め、シンポジウムに積極的に参加し、自分の考えを深めようとしている。
話す・聞く能力	B：自分の意見、根拠や具体例を明確に分けて、発言の内容を組み立てている。 A：話題として取り上げた動機やそれに対する自分の意見を明確にし、その意見を支える根拠、具体例などを盛り込んで話を組み立てている。
言語についての知識・理解・技能	B：発表をするとき、説得力のある表現になるように、話す速度や強弱などを意識している。 A：発言や質問をするとき、説得力のある話し方をしたり、その場にふさわしい語句を適切に選んだりしている。

四　おわりに

三年の第一単元での「話すこと・聞くこと」領域の実践を紹介した。子どもたちは、シンポジウムという新しい形式の話し合いに出会った。四月当初の新学級での人間関係が希薄な中であったが、全員が発表する活動を取り入れたからか、ふだんは教室では発言しない生徒でも安心して発言できる雰囲気を作ることができた。予期せずして、第二単元以降の学習でも教室で自由に安心して発言できるようになってきた。

また、「聞く」活動にも焦点を当てたので、ほかの人の発言を聞いて、「質問したいこと」「疑問に感じたこと」などを探そうと努力していた。「日本語について考える」というシンポジウムの目的が達成できたのではないだろうか。最後に、自己評価に書かれた生徒の振り返りを紹介したい。

毎日、話している日本語について改めて考えさせられました。どれだけ、わたしが言葉を大切にしていなかったか発表を聞きながら思いました。わたし自身も若者言葉を使っています。でも、それが日本語をどのようにでも変えられるという意見を聞いて、責任の重さを感じました。（以下略）